

『デイヴァガシオン』におけるヨーロッパ

―ベックフォード、ランボー、マラルメ―

岡 山 茂

マラルメは地上における言語の複数性を認めるところから出発する。それは地上に唯一至高の言語が存在しないと認めることである(「諸々の言語は、それが〔地上に〕二種類以上存在するという点において、不完全である」注)。詩人たちの無意識のうちの母国語崇拜に彼が敏感なのもそのためであった。たとえば「対岸から見たテニソン」ではこう語っている。

詩人という人種はおのれの感覚に閉じこもり、言語の響きというものについてはみずから本能的達人と御機嫌に決め込んでこれに忠節を尽くそうとするあまり、この秘境に第三者を容れることを嫌悪する。

彼らは、この点でいささか類を見ないほどの、おのれの領域への愛国心の持ち主である。

詩人はこのように本質的に「愛国心の持ち主」(patriote)であるゆえに、たとえばテニソンの死去に際してフランスの詩人に意見を求めてみても、このイギリスの桂冠詩人への正しい評価は期待できないとマラルメは言うのである。しかし散文集『デイヴァガシオン』には、そのような愛国心など初めからもたぬか、あるいは突然かなぐり捨てて、ヨーロッパという複数の言語がしのぎを削る場に飛び出した二人の人物もまた描かれている。イギリスの文人ベックフォードとフ

ランスの詩人ランボーである。一方は古きよきヨーロッパを旅して故国イギリスに戻り、他方はそれが崩壊した後の新しいヨーロッパを移動してその外に出る。

彼らの移動の振幅は、登場するほとんどの人物がパリとその周辺をうろついている『ディヴァガシオン』という書物において、例外的に大きいと言わねばならない。二人の移動を描くことでマラルメは何を言おうとしたのかを私はこれから探りたいが、それは同時にこの書物の「大地」の拡がりをも具体的に確かめることにもなるはずである。

一 ベックフォード

(一) 空想の翼

ベックフォードは幼いころから類い稀なる空想家であった。父親の図書室で数々の東洋風物語を読み、その魅力に取り憑かれていたという。マラルメはベックフォードの回想録から次のような引用をしている。

若やいだ空想の中、古代アラビアの怪鳥ロックの翼

にまたがった私は、もはや人界をよそに、妖精たちとその魔術に包まれて飛遊していた。

「古代アラビアの怪鳥ロック」に乗って空を飛ぶという、空想による飛翔の能力(トランスポジション)は、『ディヴァガシオン』においては貴重なものである。なぜなら、ほかのすべての詩人たちの「飛翔」がそれによって相対化されるからである。たとえばランボーは詩によるトランスポジションを放棄して自分の足で大地を移動すること(デプラスマン)を選んでいる。またマラルメは、ベックフォードとランボーとの折衷的な在り方、つまり移動しつつ夢想するという「ディヴァガシオン」に甘んじる。つまり、イギリスの幼いベックフォードに可能であった書物による精神の飛翔が、一九世紀末のフランスの詩人たちには不可能なものとなってしまっているのだ。それはいったい何故なのだろうか。

マラルメによれば、地上から離脱するためには「ヘリウム」の力に身を委ねることが必要である(「酔乎た

る夢、内奥のおのれのみを相手として想像が錬磨した一つの夢、それだけが〈詩〉に到達するのだ。庭園、王国、客間のかなたに夢を運び去るのは、まことにヘリズム〈の力であろう〉。それならば、少年ベックフォードを運ぶ「古代アラビアの怪鳥ロック」とは、この「ヘリズム」の力にはかならない。それを自らのなかに感知しえたからこそ彼は書物の世界に飛翔できたのだ。しかしまた、彼のその類いまれな詩的感性は、父親の館(フォントヒル邸)の内部で育まれたものである。そこには「イギリスでも有数の壮大な広間」があり、それが少年の夢の飛翔に重要な役割を演じていた。ベックフォードの回想録からの次のような引用が読まれる。

天井は高く、こだまが響き渡った。そしておびただしい数のドアが、ほの暗くどこまでも続く曲がりくねった廊下をへて建物のさまざまな部分に通じていた。私はそこから想像の広間を、すなわち私自身の邸の広間から魔王の邸のそれを、生み出したのであ

る。

つまりフォントヒル邸の広間はそのまゝ物語の空間でもあって、それゆえ書物を閉じても空想は途切れることなく続くことができたのだ。ベックフォードのトランスポジションは、夢想にとって理想的な環境でもあったイギリスの大邸宅で育まれたということが出来る。

(二) ヨーロッパ遊学

しかし彼の夢想癖はヨーロッパに遊学しているときも変わらない。マラルメはこう書いている。

父親の書齋の得たいの知れぬ書物の山から追われ、その〈ヘトルコ風閨房〉をあとにして、スイスで法律と科学の勉強をしているときでも、オランダ、ドイツ、イタリアを旅するあいだも、精霊は青年の心に取り憑いて離れなかった。

もとよりベックフォードは、彼を「傑出した政治家に

育てよう」とする後見人たちの思惑で、「贅沢な教育の仕上げとして、追放されて、勉学に励んでいた」のであるが、その思惑も当てがはずれたというべきだ。つまり、ヨーロッパのどこにいても彼は父親の館の「想像の広間」を作り出し、そこに身をおいて幼いころの夢を蘇らせてしまうのである。ヨーロッパの古典を学ぶ以上に「ペルシャやアラビアの作家」を学び、「ラテン語やギリシャ語と同じ程度に、東洋の言葉のいくつかが彼のものになった」といわれている。しかしそのことは、彼にヨーロッパへの関心がなかったことを意味しない。それどころか、彼はしっかり当時のヨーロッパを探索している。「千七百某年の世界を遍歴する若き遺産相続人は、王侯のような供揃いと外交使節並の旅行推薦状のおかげで、古きヨーロッパの聖域を探索するのに辛うじて間に合った」とマラルメは言っている。フランス大革命以前の「古きヨーロッパ」を、至るところで貴族たちの手厚いもてなしを受けながら、思いのままに移動することができたというわけだ。ここで「古きヨーロッパの聖域を探索する」と訳されて

いるところは、原文では *pénétrer dans l'arcane de la vieille Europe* となっていて、「古きヨーロッパの秘法に通じる」とも読める。要するにベックフォードは、若いころの遊学によってヨーロッパのエッセンスをすっかり自分のものとすることができたのだ。後にイギリスに戻ってから「数カ月間のポルトガルへの散歩」などをしてはいるが、それもヨーロッパが彼にとっては自分の庭のように親しい空間となっていたからである。ベックフォードは空想によってアラビアに飛び立つとともに、「古きヨーロッパ」を自在に旅する特権も持っていた。その旅はいずれも見事な散文で綴られる旅行記となった。マラルメによれば、彼の散文は一九世紀後半のフランスの詩人たちの詩句と同じくらいの完成度に達していたという。それは彼の場合、実際の空間移動（デブラスマン）と精神の飛翔（トランスボジション）とがお互いに還元可能なものであったからである。書物のなかのアラビアと父の館の客間がつながっていたように、ヨーロッパ各地の風光も彼の夢想とつながっている。かつて本を開けばいつでも「怪鳥

「この蒐集家は輝かしい本物の言葉たちを手に入れ、それらを貴重な出土品よろしく贅沢かつ慎重に取り扱う。持ち帰られて、あとで中身を吐き出させられた手帳の数々」とマラルメは書いています。ベックフォード

にとつてヨーロッパとは、そこから「本物の言葉を蒐集する」ための、「書物」と変わらぬひとつの表象空間であったのだ。

しかし忘れてはならないことは、自分が訪れているのが「古きヨーロッパ」であり、それがいづれ崩壊するであろうことを彼が予感していたことである。ベックフォードはフランスで、貴族たちばかりでなく民衆のなかにも姿を現し、大革命の進行をつぶさに見聞していたとマラルメは伝えている。つまり単に貴族たちのヨーロッパばかりでなく、新しい世紀へと向けて動き出した、民衆のヨーロッパをもベックフォードは知っていたのだ。《パリの革命委員会は、彼の旅券の終りに、「パリはこの人物が去るのを惜しみつつ見送る」

という言葉をわざわざ書き加えている》とマラルメは書いています。さもなくばその『ヴァテック』が、「現代の想像力の草創期における最も誇るべき賭けの一つ」になることはなかったであろう。「東洋」に憑かれた夢想家は、彼の将来を心配する周囲の者たちを不安に陥れたけれども、それは彼のせいではない。「古きヨーロッパ」が崩れようとしているときに、彼はだれよりも切実に自分の生きているその空間の危機を感じ取り、それゆえアラビアの物語の世界に救いを求めていたのだから。

(三) 母国語の大地

ベックフォードは『ヴァテック』をフランス語で書いた。この外国語を彼は幼いころからイギリスで習ったはずだし、ジュネーヴにいた三年間にも使う機会があったから、かなり自由に使いこなせたはずだとマラルメはいう。しかしさらに次のように付け加える。

母国語以外の言語をもちいるという行為は、一般に、

書くことを通して、青年期特有の妄想から自らを解放するための手段である。しかしベックフォードの場合、ここに一種の嚴肅な構え以上のものを見てはなるまい。つまり、彼の現実の人生をまちうけていたものとはまったくかけ離れた、ある稀有の仕事に立ち向かうためにどうしても必要だった身構え以上のものを。

想像力は母国語という大地に根を下ろし、その養分で生育するだろう。そしてその過程で「青年期特有の妄想」も生まれる。したがって母国語以外の言語で書くということは、その「大地」の引力から逃れ、「妄想」を断ち切るのに役立つ。しかしベックフォードのような生粋のヨーロッパ人にとっては、想像力の飛翔に母国語の大地の引力が及ぶようなことはないだろう。なぜなら彼は「古代アラビアの怪鳥ロック」に乗ったままだここでもない空を飛んでいるからである。その彷徨はイギリスあるいはヨーロッパにとどまらない。しかしヨーロッパ滞在を終えてイギリスに戻るベック

クフォードが、これまで親しんできた空想を書物という形で純粋なまま残しておきたいと望んだとしても不思議ではない。もとより、フォントヒルの父親の館と「古きヨーロッパ」で培った自分の夢想が、もはや不可能な夢にすぎないことを彼はよく知っている。それゆえ、イギリスで現実の生活にまみれる前に、その夢想を外在化させて、いつでも手に取れる書物の形にしておきたかったのだ。そのためには英語よりフランス語の方が都合がよかっただけである。かくしてベックフォードは、「寢食を忘れて三日二晩ひたすら書きに書いて」、フランス語で『ヴァテック』を仕上げることになった。アラビアの精霊たちから自由になり、ヨーロッパの大地をしっかりと踏みしめるためにはそのことがどうしても必要だった。

(四) お伽話めいた引越し騒ぎ

遊学を終えてイギリスに戻ったベックフォードには「莫大な財産を管理する」という仕事があるのみである。そこで今度は住み慣れた父親の館へフォントヒル

邸)を惜しげもなく取り壊し、そこから遠くない所に

ヘフォントヒル・アペイ)を建てることに彼は熱中し始める。そのために贅の限りを尽くすのに、「社会的な名譽への色目やらはこれっぽっちもなかった」とマラルメはいう。「代りに、素晴らしい建物をひたすら絹で飾り壺で満たすこと、すべての家具を当時まだ知られていなかった趣向で配置すること、ただそれだけのことだった」。けれどもその「僧院」は後にいとも簡単に売り払われ、それからは「ランズタウンに建ち残った」古めかしい家に移り住む。そしてそこで、「昔の思い出を光りまばゆいページへと変容させる」ための晩年を過ごすことになる。このベックフォードの「お伽話めいた引越騒ぎ」について、マラルメはこう語っている。

アラビア物語『ヴァテック』を書いた後も生き続け
たこの夢想家にあつては、お伽話めいた引越騒
ぎは、崩れたり建物の形に立ち上がったたりする雲の
動きをみて楽しむ想像力の戯れと大差なかったこと

は明らかだろう。

つまり『ヴァテック』を書いたのちも、ベックフォードは自分の館をまるで空想のアラビア物語でもあるかのように作り上げては壊して楽しんでゐるのだ。これは要するに、幻想のアラビアに遊ぶ彼をイギリスの大地がやさしく受け入れているということを意味する。いつまでも彼が幼いころの夢を放棄しないでいられるのも、イギリスに彼の気まぐれを許すだけの「寛容さ」*generosité*があつたからに違いない。「禁域」*(Clashes)*でマラルメはこのイギリスの大地の寛容さについて語ることになるが、フランスの大地にはありえないその風土の存在を示すことで、マラルメは逆にフランスの大地を相対化することに成功している。

一九世紀後半のフランスにおいて、東洋風綺譚と呼ばれるジャンルはフロベールの『聖アントワーヌの誘惑』を除けばほとんど見るべきものがない状況にあつたとマラルメはいう。フランスではほとんど忘れ去られていたベックフォードの『ヴァテック』を彼が再刊

しようと思いついたのは、そのようなパリの文壇に一石を投じたからである。しかしこの作品の再刊によって、ランボーが放棄しリラダンが執着した「文学」という制度にも別の方向からの光が当てられるはずであった。リラダンにしるランボーにしる、彼らがパリにやってきたのは当時のフランスの首都に「文学」というあたらしい制度が生まれていたからにほかならない。ランボーはやがてそれに飽き、リラダンは虚妄と知りつつ最後までそれと戯れるのであった。そのようなパリの文学に、ベックフォードの作品は新鮮な驚きを与えることになるだろう。なぜならそれは、「文学」などいっさい指向することのなかった外国人の手によって書かれたものでありながら、見事な「文学」となっていたからである。その作品の再刊が照らし出すことになるのは、かつてのヨーロッパと現在のヨーロッパ、あるいはかつてのヨーロッパを大事に保存しているイギリスと、それを根こそぎにしたフランスとのあいだの断層である。イギリスのベックフォードが思いどおりに館を改築して莫大な財産を湯尽して

いるというのに、フランスのブルターニュ地方の大貴族の末裔リラダンはなぜパリの街路を貧窮しながらさまよわねばならないのか。あるいはなぜマラルメは自分のためではなく群集のための「詩の宮殿」を都市の真ん中に建てようと夢みるのか。しかしここではベックフォードとは反対に、「夢を放棄したゆえに(……)はるか遠く離れたところにしか新しい状態を見つけないことができなかった」もう一人のヨーロッパ人、アルチュール・ランボーについて書いておかねばならない。

二 ランボー

(一) デブラスマン

ベックフォードは書物を放棄することなくヨーロッパを移動した。どこにいても空想の中でアラビアへと飛び立てたのはそのためである。ランボーの場合、その移動は〈夢〉の放棄の代償としてある。つまり自分の足で大地を踏みしめながら歩くデブラスマンの欲望が、ベックフォード的トランスポジシオンの欲望を凌

いでいるのだ。問題は、このトランスポジシオンからデブラスマンへの不可逆的な推移のなかに、「古きヨーロッパ」の崩壊という事態が隠されているということだ。その廃墟を自分の脚で移動するランボーは、「新しいヨーロッパ」という処女なるページに自らの身体でエクリチュールを描くことになるだろう。舞台の踊り子がマラルメの目に“Signe”として映るのと同様、ランボーは大地の上を移動する「至高の記号」(un signe suprême)となつてパリの詩人たちを戸惑わせる。ランボーの名が出た途端に火曜会に集まる詩人たちの間に「称賛とも戸惑いともつかぬ沈黙」が支配したとマラルメが伝えるのは、ランボーの身体によるエクリチュールの「沈黙」の効果を語っているのだ。マラルメはパリの詩人たちの精神の貧しさに敏感である。他人の噂話に終始している彼らと、ひとりそこから離れて大地に自分の脚で詩を書き込んだ詩人の、そのエクリチュールの見事さとをわれわれに比べて見せる。そして三度に互る彼の強制されたフランスへの「帰還」を語ることで、ひとまずはパリの詩人たちがい

るヘジャーナリズムの世界の勝利を認める。しかしその世界においてもランボーが最後には勝ち誇ることを示すだろう。彼の「亡霊」がパリの街を徘徊し、その不在のあいだに輝きを増した自らの名声を享受して、「著作権料を要求する」ことがあってもおかしくはないとマラルメはいう。パリの詩人たちはみなその不在の幻惑にさらされて生きているからである。

(二) ランボーとヨーロッパ

「ヨーロッパという、耐え難い気候や習慣への完全な訣別」に至るまで、ランボーは二度にわたってヨーロッパをつぶさに歩き回っている。マラルメによれば、それはブリュッセルでヴェルレーヌと決裂し、友人も文学も放棄してから後のことである。

こうした悲劇的な事情のあとで、ランボーは孤独になりましたが、決定的危機における彼の心を読み取ることを許すようなものは、何もないといつていいでしょう。(……) 事実関係はといえば、一八七五年

以前に、何らかの目的でイギリスに戻ったはずですが、取るに足らないことです。ついで、教育的地位と、彼が自分の国語におけるあらゆる熱狂を捨てて収集した、諸国語に対する才能とを持って、ドイツに渡りました。鉄道でサン・ゴダールまで行き、次には歩いてアルプスを越え、イタリヤに到着。数カ月滞在、キュクラデス諸島まで足をのばし、日射病にかかって、公の手で本国送還となります。

東方からの朝風に、頬をなぶられてからあとのこと
です。

マラルメはこのように逐一地名を挙げながらランボーの移動を追っている。それ以外に「彼の心を読み取ることを許すようなものは何もない」からであるが、『ディヴァガシオン』という、「徘徊」をめぐる書物の大地の広がりもまた、こうして具体的に示されることになる。相変わらず高踏派風の詩を書いてバりに留まる詩人たちから遠く離れて、しかしまた直接「東方」へと

旅したフロベール、デュ・カン、ネルヴァルらとも異なり、ランボーがつぶさにヨーロッパを移動していることがここからは判るであろう。注目したいのは、彼が「母国語におけるあらゆる熱狂」を捨てることによって「諸国語に対する才能」を得たと言われている点だ。詩を書くのをやめたことで、彼は「文学」に関わる者に共通の、無意識のうちの母国語崇拜から解放されている。その精神は各国の言語の差異そのものに興味を抱き、それを「収集する」(collector) ことに喜びを見いだしている。そして、このようにして複数の言語の場に身をさらすことで、ランボーはむしろ「古きヨーロッパ」を自在に巡ったコスモポリタン、ベックフォードに近い存在となっているのだ。しかしもちろん彼には「王侯のような供揃いと外交使節並の旅行推薦状」はない。つまりヨーロッパ各地に散らばりベックフォードを手厚くもてなしてくれた貴族たちの庇護はない。当時の古きよき表象空間は碎け散ってしまっただけ、あるのはただ剥き出しになったヨーロッパの大地と、そこに照りつける太陽だけである。ランボー

は「日射病」にかかり「本国に強制送還」となるだろう。しかしそれは、マラルメも書くように「東方からの朝風 (l'avant brise du levant) に頬をなぶられてからあとのこと」である。こうしてわれわれにも初めて『ディヴァガシオン』の東の地平線が見えてくる。

(三) ジャーナリズムの罠

しかしランボーはすぐには地平線の彼方に消えられない。フランスに強制送還となったランボーは再び出奔するが、しかし今度も「本国送還」になってしまうのである。

なにしろ、一八七六年にオランダでの取引で雇われたのは、スマトラ行きの募集兵としてであり、数週間で早くも脱走兵となり、大胆にも自分が人買いとなる前に、貰った手当をたいてイギリスの船に乗り込み、そこで小金をためたかと思うと、デンマークとスウェーデンで失くし、そこからまた本国送還なのですから。

このように描かれるランボーの「強制送還」は、彼がけっきょくはマルセイユに戻り、その病院の一室で一生を終えることになる三度目のそして最後の「送還」の伏線をなしている。興味深いのは、マラルメが敢えてジャーナリズムの手先となってランボーの行方を追いかけていることだ。「他人の人生を表現するために、それを判りやすくももらしい断片に整理するなどということとは、まったくもって失礼なことです。こうなれば、私としてはこの手の悪事をとことんまで押し進めるよりほかはありません」と言いつつ、彼はランボーの足跡を追い詰める。それゆえこのランボー論はシリアスな探偵劇の様相を帯びてくる。

一八七九年には、キプロス島で大理石石切り現場の親方となり、そのあとエジプトへ、アレキサンドリアへと出掛けて行き、その余の日々は、「奴隷売買業者」となっているのが見られるでしょう。

ヨーロッパへの、耐え難い気候や習慣への完全な決別も、やはり、アビシニア（軍事的事件の昨今の舞台）の近くの、ハラルへの旅によってですが、そこでこの亡命者の一切の行動に堪んしては、砂漠のように沈黙が広がっています。彼は沿岸とその対岸のアデンで、象牙、砂金、香料などの取引をしました。

このようにマラルメはランボーが砂漠の向こうに消えるまで執拗に追いかけているが、またこのようにして、ヨーロッパを覆い尽くしている「耐え難い気候と習慣」がジャーナリズムという新手の表象にはかならないことを具体的に語るののである。実際、「古きヨーロッパ」が崩壊した後のヨーロッパは「ジャーナリズム」の網にすっかり包み込まれているのであって、それゆえにこそマラルメは「それからのことは謎だ」と言いつつも詳細にランボーの足跡を追いかけることができたのである。そして最終的にランボーがヨーロッパに回収されるのもやはりジャーナリズムによってである。

その知らせを新聞を通して知ったとマラルメは書くだろう。

一八九一年に、思いがけないニュースが新聞によって流れました。私たちにあって、かつて今も詩人、旅行く詩人であったひとが、一財産持ってマルセイユに上陸し、関節炎の手術を受け、最近そこで死んだというのです。

つまり、新聞という「巨大な鳥」がどこからでも情報を運んで来て、いながらにして世界じゅうの出来事が知れてしまう時代がすでに訪れていたのだ。かつてベックフォードを空想のアラビアへと運んだ「怪鳥ロック」は、ここでは新聞という巨大な翼をもつ鳥に変貌し、ヨーロッパの外に出ようとするとする詩人をバリにまで連れ戻す役目を負っている。「誰もジャーナリズムからは決して逃れられない」(Nul n'échappe décidément au journalisme)とマラルメは『ディヴァガシオン』の前置きで書いている。ランボーもその例外では

ないのである。

(四) ヨーロッパの外部

いったんヨーロッパという複数の言語の場を放浪した後、そこがフランスと変わらぬ「耐え難い気候と習慣」の場ではないことを知ったランボーは、さらにその外へと出る試みを続ける。そしてひと度はヘジャーナリズムの追及を振り切って砂漠の沈黙に触れることになる。ベックフォードが決して越えようとはしなかったヨーロッパの限界は、こうしてランボーによって初めて越えられたと言うことができる。

『ディヴァガシオン』においてはランボーを除いて誰もヨーロッパの外に出ていない。「黄金」(O)の大西洋航路の豪華客船は火災をおこして海に沈んでしまし、そこで話題になるパナマ運河事件のレセップスの名は、雑誌発表のオリジナルでは挙げられていてもこの散文集からは消し去られている。また一八八九年の万国博覧会が言及されることはあっても、栄光の絶頂にあったエッフェルの名は出て来ない。つまりここ

では、ランボーだけがヨーロッパの外に出ることに成功しているのだ。逆に言えば、植民地開発によって膨張を続けるヨーロッパではなく、その「外」がここでは問題なのである。それが彼によって発見されたことで、『ディヴァガシオン』におけるヨーロッパ、そしてフランスは初めて完結することを知らるだろう。

(五) ランボーのトランスポジション

誰も、マラルメでさえもランボーを追いかけ切れなかったのだから、ヨーロッパを出たあとのランボーは『ディヴァガシオン』においては謎である。突然バリの上空に現れ、地平線の彼方に消えていったこの「流星の輝き」を、人々は地上にいながら遙かに眺めるしかない。しかしその「飛翔」こそ、彼が文学を放棄することによって逆説的に成し遂げた現代のトランスポジションなのだ。ベックフォードのトランスポジションは「詩のヘリズム」による精神の飛翔であり、それに乗って彼は空想のアラビアにまで飛んでいった。一方ランボーは、ひたすら大地を移動することで、自ら

「流星」になるというトランスポジションを果たしている。その「飛翔」を地上から眺めながら、パリにいる詩人たちは地上に取り残されている自分たちの姿を思わざるをえない。それは、「秋の嘆き」(La Pensive d'automne)で「マリアがどこかの星へと消えた」と、地上に残された自分を哀れむ語り手の姿と重なる。飛翔するすべもなく地上を留まる哀れな詩人の姿である。

もはや「文学」は不可能なこと、そして詩人であるためには詩を書くのをやめて「移動する」しかないことがランボーによって示された。これは、ベックフォードが自分の住もうとする館の改築という倒錯したデプラスマンによって、かつてひそかに予言していたことである。しかしランボーは、その苛酷な最期によって、現代においてトランスポジションを果たすためには決死の覚悟が要求されることを明らかにした。ベックフォードには空想の世界に遊ぶ愉しみがあつたが、ランボーのトランスポジションにはいかなる快楽も伴わない。彼には「有名になつたこと」を楽しむ余裕す

ら残されてはいなかった。マラルメは、今パリで「ひとつの仮定がしきりに取り沙汰されている」という。それは、「もし彼「ランボー」が、青春のまばゆい作品を自発的に放置したあとで、戻ってきて、それらがいまや花開き、彼方のオアシスのそれに劣らず、いやそれ以上に、かつての栄光への好みにふさわしい豊かな実りを時代にもたらしていることを知ったら、彼はふたたび否認するだろうか、それともそれを摘みとるだろうか」というものである。つまり不在の間に輝きはじめた自らの詩人としての名声を、詩人であることをやめたランボーが受け入れるかどうかというきわめてジャーナリスティックな関心である。しかしランボーはそれに答える事なく死んでいった。そのことにマラルメはむしろ「運命の神」の配慮を見ている。

役割を果たし了えた人間に予告を与える運命の神は、おそらく、彼があまりの当惑にふらつかぬようにと、いまは異国のような生地を踏んだ足を断ち切つたのでした。あるいはまた、終わりが近づいたときには、

その上すぐさま、この患者と、たびたび彼に呼びかけたさまざまな声、とりわけ偉大なヴェルレーヌとのあいだに、病院の壁やカーテンという沈黙を置いたのです。

しかしマラルメは前言を翻してこうもいっている。つまり名声などはどうでもよいものであるゆえに、ランポーはそれを「誇り高い無関心さをもって」受け入れるかもしれないというのである。

しかしながら、結局のところ高邁で、妥協のなかった精神的にアナキストのこの生涯を、そこにありえたかも知れぬ美しさに沿うように仮説的に掘り下げてみるならば、この当事者は、きつと、かつて彼であり、しかしもはやいかようにも彼ではない誰かに関することのように、誇り高い無関心さをもって名声への到達結果を受け入れたのではないかと推測すべきでしょう。外地から持ち帰ったお金にさらに加えるべく、非人称の亡霊が、バリをうろつきま

わってもっぱら著作権を要求するようなどころまで、厚かましさをふるを発揮したりしないとした話です。

このようにしてマラルメは、火曜会に集まったパリの詩人たちを支配した「称賛とも戸惑いともつかぬ沈黙」を解きほぐそうと試みる。アラビアやアフリカの大地を移動したその「身体」と、パリの街路をさまようその「亡霊」を描くことで、そのどちらをも相対化し、ランポーの「神話」を解体しようとしているかのようだ。

しかしそれがマラルメに可能であったのは、ランポーにはヨーロッパの外でしか見つけられなかったものを彼がパリで見出し出していたからだろう。たとえば都市の夕闇に目覚める「劇場」という怪物。パリという古きヨーロッパの廃墟(「高踏派のさびついた看板が風に揺れている」)に詩人として留まるということとは、通りを歩く人々を飲み込んで空腹をいやすこれらの怪物と戦うということを意味した。しかし胎内に飲み

込まれたマラルメは、その舞台の上に「波打つモティーフによって署名する」オーケストラの「花押」(「宮廷」)やら、バレリーナ、マイム役者が身体で描くエクリチュールを見いだした。それらの沈黙、つまり言葉のものではないポエジーを舞台から書物に移すこと、あるいは「交響楽の〈書物〉への転位」(「詩の危機」)、それをマラルメは「トランスポジシオン」と呼んでいた。つまり、地平線の向こうに消えた流星ランポーは、〈書物〉における「詩人の語り手としての消

滅」(La disparition élocutoire du poète)をめざしたマラルメのなかに生きているのである。ヘジャーナリズムを越えようとする果てしない夢として。

〔注〕 筑摩書房版マラルメ全集Ⅱ『ディヴァガシオン』二二三頁、「詩の危機」より。以下の引用もすべてこの版からのものです。

(一橋大学講師)